

会 師 医
市 師 医
小 師 医
牧 師 医
市 師 医
苦 師 医

道 正
院 九 十 四

早期の大腸がん

最近、日本でも大腸がんが増えてきており、食生活の欧米化がその原因といわれている。特に肉類の摂取の増加と相関があるらしい。また、肺がんと喫煙の関係はよく知られているが、皮肉なことに喫煙者に大腸がんが少ないというデータがあるのも事実である。これは、ニコチンの平滑筋収縮作用が発がん物質が含まれているかもしれない便

自覚症状出る前に検査を

の排せつを促すからではないかといわれているが明らかではない。

胃がんは検診で発見され早期の場合が多いため治療（ちゆ）率が非常に向上している。しかし、大腸がんは、血便、便通障害、便が細くなるなどの自覚症状が出てから受診してくる場合が多く、進行がんで発見されることが多い、痔（じ）だと思っ

ていたらがんが隠れていたということも少なくない。

かつて私は札幌市内のある肛門科病院でおよそ千二百例の大腸内視鏡検査（これは痔の手術を受けたあと、大腸の検査を希望した人に行ったものです）を行って十七例の大腸がん患者を発見したが、そのうち六例はポリープ内がんという早期のものでした。この治療は、内視鏡下

でポリープを切除し、その後定期的に経過を観察するという方法が可能です。つまり、検査の時にポリープがあればその場で内視鏡下で切除し、そのポリープの病理診断で、たとえがんであっても切除断端にがんがなければそれで治療が終わりということ。

胃がんはたとえ早期でも手術をしなければならぬが（最近

道内でも、早期胃がんの内視鏡下の切除を試みている施設があるが、早期の大腸がんに関してはこのような内視鏡下の切除という治療方法が可能である。そのためには、早期で発見されること、つまり自覚症状が出る前に検査を受けることが必要ないことは言うまでもない

